

「生きる力」を育てる住教育プログラム

- 学校・民間・行政の協働でつくる“住”の授業 -

鷲尾 真弓*¹
鈴木 洋子*²
八木 景子*³
小林 賢一*⁴
相羽 史子*⁵

キーワード： 1)住教育 2)すまい 3)学校・民間・行政による協働のしくみ 4)生きる力 5)子ども

1. はじめに

1) 市民の住宅相談から学んだ「住教育」の必要性

神戸市すまいの安心支援センター(愛称「すまいるネット」)は、阪神・淡路大震災の経験を教訓に、市民が自ら安心なすまいを選択できる環境づくりを目指して、平成12年10月に神戸市が設置したすまいの総合機関である。「市民のすまいのトータルサポート」を掲げ、建築士や融資相談員・消費生活相談員などが、それぞれの専門性を活かしてさまざまな相談に応えるほか、物件・関連情報の提供、マンション管理組合などのネットワーク構築支援、セミナー開催など、社会情勢や市民ニーズに迅速に対応しながらすまいに関する幅広い業務を展開している。

すまいるネットは開設以来、1日の平均相談件数約21.4件、来訪者約119名と多くの市民に活用されているが、日々の相談業務を通じて、自らすまいのことを深く調べたり考えたりする機会をつくらうとしない市民が予想以上に多いことに気がついた。「すまいのことは専門家にまかせるもの」という先入観が強く、業者の言うことを鵜呑みにしてしまい、一生に何度とない高額な買い物にも関わらず、いとも簡単に契約してしまう。スーパーでの買物では値段と品質をしっかりとチェックするのに、対象が「すまい」になると途端にチェック機能が働かないのである。また、不幸にもトラブルに発展してしまった事例では、「もう少し考えていれば」「あとわずかも情報を持っていれば」防ぐことができたであろうものが多く、後で悔しい思いをするケースが少なくない。

なぜこのような傾向が見られるのであろうか。書籍・新聞からテレビ・インターネットまで多様な媒体で多量の情報が溢れる時代にあって、すまいに関する情報は決して不足しているとはいえない。考えられる要因は、多くの市民に『すまい=住空間は自らが主体的に創るもの』という意識が備わっていないことである。自ら行動して情報を獲得しようという姿勢と、自分に必要な情報を取

捨選択する能力が身につけていないために、自らのすまいに対しても受身で消極的な行動をとってしまっていると思われる。

そのような状況に対し、すまいるネットでは「住」に関する消費者教育=「住教育」に注目した。住教育とはいわゆる建築教育とは異なり、住宅の作り方や入手方法のみならず、人間生活の場として住宅及びその周辺の環境について、現状と現在までの経緯、あるべき姿、それを実現するための手立てについて学習し、各人が個人として、社会の構成員であり住文化を担う一員として、住生活及び住環境について高い見識を得、それを実現していく主体者としての基礎的な能力をつけていくこと^{文1)}である。本来は児童・青年期での学校教育を中心にこのような住教育を受けることで、適切な判断力や価値観、主体性を身につけ、成人したときに主体的に自らのすまいを形成することが期待される。しかし、現実には教育現場における住教育は実施されにくい状況にあり、そのことが後の受身で消極的な行動につながっているのではないかと考えたのである。

2) 教育現場における住教育の現状

学校教育においては、家庭科を中心に「住」を学習するカリキュラムが組まれており、室内の整理・整頓や清掃、快適な室内環境などの内容を小学校5年生から学習することになっている。なぜ教育現場で住教育が実施されにくいのか。市教員たちからは衣食のように実習ができず、すぐに実生活で活かせない、子どもの家庭環境や生活レベルと直結してしまうため、等しく教材として扱えない、専門的な領域のため、情報が少なく内容が難しい、などがその理由として挙げられた。同様のことは小澤^{文2)}も指摘しており、これらは全国共通の課題であろう。また、完全週休2日制や総合学習の導入により家庭科授業時数や授業内容が減少していることも、「住」の学習を進める上で大きな壁となっている。小学

*² (社)兵庫県建築士会女性委員会委員長

*³ (社)兵庫県建築士会女性委員会委員

*⁴ 神戸市すまいの安心支援センター相談部企画課長

*⁵ 神戸市すまいの安心支援センター相談部企画課

*¹ (社)兵庫県建築士会女性委員会委員

2000年神戸市入庁。神戸市すまいの安心支援センターで住情報の普及・啓発や住教育の推進等に取り組む傍ら、(社)兵庫県建築士会に参画して市民と専門家のつながりづくりに努める。現在、長田区まちづくり推進課。

校では家庭科の授業時数はかつて2学年で合計140(1単位時間=45分)であったが、平成10年の学習指導要領では115に減少している。衣・食にかかる時間と比較して元々少なかった「住」の時間はさらに削られ、内容を深めて学習することが難しい状況となっているのである。もちろんそのような状況に危機意識を強く感じ、敢えて積極的に「住」の学習に取り組もうとする教員もいる。しかし、多くは問題意識を感じながらも有効な手立てがないまま、教科書を読む程度にとどまっているのである。

3) 住教育ワーキンググループの設立と活動

このような住教育の現状を改善し、市民の「住」に関する意識と知識を向上させ、主体的にすまいにアプローチできる生活者の育成を図ることを目的に、すまいるネットは平成14年9月に住教育ワーキンググループ(以下WGという。)を設置した。このWGは、家庭科教育及び消費者教育に精通した学識経験者、市民への普及啓発に取り組む建築士や市立小・中学校家庭科担当教員、そして市教育委員会や住宅関係部局等の行政職員によって構成され、教育現場における住教育の実態把握と今後の展開可能性、そのあり方や充実策の検討などを行うものである。

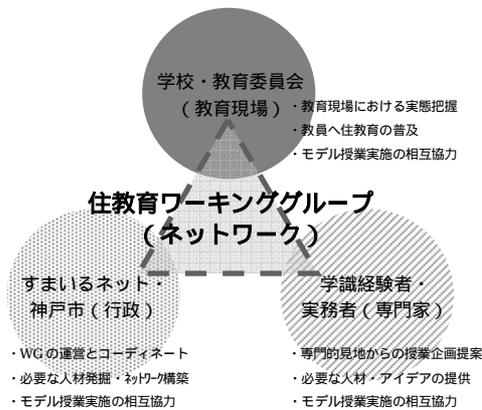


図1-1 住教育ワーキンググループの構成

当初より、子どもたちへの住教育の必要性と、学校教育の中で適切な住教育が実施されるための教員サポートの重要性がWG内での課題として共通の認識であった。そこで、教育現場でのニーズを吸い上げ、学識経験者や実務者などの専門家が有する人的資源や情報・ノウハウを活かし、行政がそのコーディネート等を行う図1-1のようなネットワークを構築した。これを基盤にWGは住教育に関するさまざまな活動を展開してきた。

WGで行っている活動は主に二つある。一つ目は住教育に関する研究・情報交換で、現職教員の生の情報を中心に住教育の現状・問題点について認識、その対応策を議論し、また新たな取り組みなどの情報の共有化を行っている。さらに教員からの具体的な指導案、研究授業内

容などについて意見交換を行うとともに、各自の持つ専門知識・経験等を活かした独自の授業提案なども行っている。また具体的案件の議論のみならず、これまであまり接点のなかったメンバーにとって、相互理解を深める貴重な機会にもなっている。

二つ目はモデル授業の実施である。広く教員に住教育を実施してもらうには、まず「実践して、見せる」ことが必要である。そのためWGでは住教育に取り組む教員の依頼に基づき、そのサポートとして授業に参画する。依頼テーマ・内容に沿った授業企画・講師派遣等を行うモデル授業を実施し、これまで小学校で8回、中学校で2回の授業を行った。モデル授業の企画・実施にあたっては、教科や指導内容に対する十分な理解、必要な知識を持つ専門家の確保、そして子どもたちの理解を深めるための教材・ツールの開発や人的支援などが必要となる。一般的なゲストティーチャーの個人の力ではそこまでの対応は難しいが、ここでは図1-1のネットワークを生かすことで教育現場が求めるさまざまな要求を満たし、高いレベルの授業を実現させている。

2. 生きる力を育てる住教育授業の実践例

WGでは、どのような方法・教材・ツールを用いれば子どもたちに伝わりやすいのか、またどう工夫すれば学校・教員が導入しやすいのか、そして子どもたちの記憶に残したいことは何なのか、などを依頼教員とともに検討しながら、これまで表2-1に挙げた6種類の「生きる力」を育てる授業を企画・実施してきた。

表2-1 住教育授業の実践例

小学校		
タイトル	ねらい	ねらい
1 安全で安心なすまいをつくるための方法を知ろう	震災でのすまいの被害と原因、すまいの安全性確保のしくみを知り、安全で安心に暮らし続けるために、知っておくべきこと、実践できることを考え、学ぶ。	震災でのすまいの被害と原因、すまいの安全性確保のしくみを知り、安全で安心に暮らし続けるために、知っておくべきこと、実践できることを考え、学ぶ。
2 モノの山・・・どう使う？ どう捨てる？	身近なものを使って、資源の大切さを知るとともに、「3つのR」の意味を学ぶことで自らの生活を見直し、資源活用する方法を学ぶ。	身近なものを使って、資源の大切さを知るとともに、「3つのR」の意味を学ぶことで自らの生活を見直し、資源活用する方法を学ぶ。
3 快適な暮らし方を考える～夏バージョン～	換気・通風の役割を実感するとともに、機械に頼らず、気持ちよく暮らすことが小さな工夫でできることに気づき、自らの生活で実践できることを学ぶ。	換気・通風の役割を実感するとともに、機械に頼らず、気持ちよく暮らすことが小さな工夫でできることに気づき、自らの生活で実践できることを学ぶ。
4 すまいの安全性を考えよう	すまいの中にも危険が多いことを知り、だれにも優しく、家庭内事故のないすまいにするにはどうすればよいかを考え、実践する力を身につける。	すまいの中にも危険が多いことを知り、だれにも優しく、家庭内事故のないすまいにするにはどうすればよいかを考え、実践する力を身につける。
中学校		
タイトル	ねらい	ねらい
5 快適なすまいについて考えよう～照明～	身近な照明の種類やその効果を知ること、適切な照明を選ぶ知識を得、事故防止や防犯、心理的效果もあることを学び、日常生活に活用できるようにする。	身近な照明の種類やその効果を知ること、適切な照明を選ぶ知識を得、事故防止や防犯、心理的效果もあることを学び、日常生活に活用できるようにする。
6 災害に備えた住み方～地震対策編～	学校の耐震改修工事を通して、地震に対して建物を補強する意味としくみを理解するとともに、災害に備えて、自らのすまい方で工夫・実践できることを学ぶ。	学校の耐震改修工事を通して、地震に対して建物を補強する意味としくみを理解するとともに、災害に備えて、自らのすまい方で工夫・実践できることを学ぶ。

これらは本来家庭科の授業であるが、阪神・淡路大震災の教訓を学び、南海・東南海地震に備えるために、すまいの安全性にアプローチする防災学習の一面を持つ授業の依頼も少なくない。以下より、表2-1の実践例のうち3, 5, 6について、その取り組み内容を具体的に紹介する。

授業例1) 快適な暮らし方を考える～夏バージョン～

・実施時期と対象

日時：平成15年7月10日(木) 第3・4校時

対象：神戸市立岩岡小学校5年生2クラス 計78人

・実施概要

今回の担当教諭は、すまいにおける換気や通風の効果を学ぶために、ペットボトルに充滿させた煙の動きを示す実験を行っていた。これを見た子どもたちが果たしてこの換気に関する知識を実生活で役立てることができるだろうか、もっと効果を実感する授業ができないかと相談を受け、(社)兵庫県建築士会女性委員会とすまいるネットが協力し本授業を企画することになった。

企画にあたっては、実施時期が夏だったこともあり換気や通風によって「涼しく」「快適に」なることを体感と理論と数値データを関連付けて理解できるよう工夫した。つまり、実際に室内環境がどう変化するのかをデータを用いて客観的に示すことで、効果や役割を十分に納得できる内容にしようと考えたのである。測定には神戸市保健所東部衛生監視事務所の協力を得ることができ、当日は建築士6名、行政より6名を派遣した。

・学習のねらい

快適さとその要因に気づき、換気・通風の役割を認識
小さな工夫で快適なすまいができることを知り、日常生活で実践できることを学ぶ

・授業の流れ

授業の展開を表2-2に示す。

表2-2 「快適な暮らし方・夏バージョン」プログラム

時間	内容		測定		
	準備	・会場設営等	・授業開始前	窓開	
10:45	5分	挨拶 ・メンバー紹介 ・趣旨説明	・授業の流れの説明	窓開	
10:50	35分	グループワーク ・<気持ちのよいところを探そう> ・導入 ・学校探検	・集合から5分経過の状況、気分を問う。 ・教室から外に出て、気持ちのよい場所を探してみよう。 ・グループ別に気持ちのよいところを探し、マップに記入。 ・温度計で涼しい場所、そうでない場所の温度を測る。(場所と時刻を記入) ・理由も考えよう	・集まった状態(子どもたちには見せない) ・探検出発後(吹流しの設営) ・教室外の涼しそうな所	窓開
		・まとめ作業 ・教室へ戻る			
11:25	15分	グループワーク ・なぜ気持ちのよいのでしょうか ・お薦めの場所発表	・校内の気持ちのよいところを1ヶ所選び、大きなマップにシールと理由シートを貼る。		窓開
		20分 ・換気、通風の役割を目で確かめる ・気流の動きと気持ちよさを体感	・閉め切った教室の状態を問う。 ・計測器の説明。(計測方法と、計測数値の持つ意味) ・部屋の環境を変え、締め切った状態 ・壁面の窓を1ヶ所開放 ・対面の窓を2ヶ所開放 ・対面の窓を1ヶ所ずつ開放	・集まった状態 - の各状態を計測	順次窓開
	10分	・換気、通風の役割の説明 ・計測結果を報告	・なぜ空気がきれいであればいけないのか? ・温度を低くするだけでなく空気を入れ換え、風の流れをつくるのが大切。	・計測値の記録紙を投影	窓開
12:10	10分	まとめ ・窓が開けられないときの工夫 ・昔ながらの工夫 ・夏休みに工夫して、涼しく暮らしてみてください。	・換気扇の利用(湿気やにおい) ・エアコンや扇風機で気流づくり ・機械に頼らない工夫 ・すまいの中では、夏どこがよく風が通るところなのか、きれいな空気の中で暮らすにはどうしたらよいのか考えよう。		
12:20					

まず、3～4人のグループに分かれて校内を探検し、快適な場所を探して、その理由を考える。その間、教室内の窓は閉め切り、不快な室内環境をつくっておく。

教室に戻って発見した場所と理由(気温や風通し、日当たりの状況、木や庇による日よけの効果など)を発表し、快適さの要因をまとめた後、窓を徐々に開放して気流の違いと気持ちよさを体感する。実際に全部の窓を開放した瞬間、暑苦しかった室内には一気に風が通り抜け子どもたちは歓声をあげたのである。窓に取り付けた吹流しも勢いよくなびき、空気の流れを目で見る事ができた。

次に、順次計測していた室内環境データ(温度・湿度・気流・CO2濃度・粉塵)をグラフで見せる。閉め切った状態で人が集まると空気が汚れ不快感を引き起こすが、窓を開けることでそれが解消されたことが読み取れ、換気・通風の役割がわかる。特にCO2濃度の増減は明確な結果が出た(写真2-1)。また、換気扇やクーラー、扇風機などの活用や簾・藤棚・打ち水・風鈴など昔ながらの工夫も紹介し、快適なすまい方の工夫への動機付けを行った。



写真2-1 授業の様子

・授業を終えて

後日、担当教諭より「子どもたちの感想から、担任が教えられないことを理解しており、自然の風を意識した行動もとってくれそうだ。今回の学習は冬バージョンにも活かせるのでとてもよかった。」とお礼とともに子どもたちの感想文(表2-3)を送っていただいた。こちらのねらいがほぼ伝わったことをうれしく思うとともに、学校探検成果の発表・まとめの時間不足や天候に左右される点、本プログラムの汎用性など課題も残った。

表2-3 子どもたちの感想(抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱり自然の涼しさが一番!と思い、自分で作ってみた。きりふきを扇風機にふきかけたり、布団の下にすのこをひいたり... ・体で感じる涼しさと気分で感じる涼しさがあることがわかった。 ・二酸化炭素などがたまって気分が悪くなったりするんだな。 ・(学校で気持ちのよいところは)ほとんどの意見が風とおりのよいところでした。 ・すぐにクーラーや扇風機に頼らず、窓を開けたりしたいです。 ・音で涼しく感じるの不思議と思った。 ・窓を開けて外の汚れた空気が入ってこないのが不思議。 ・温度計ではかる温度と体で感じる温度がちがうとは、ぜんぜん知らなくてすごいなと思いました。
--

授業例2) 快適なすまいについて考えよう～照明～

・実施時期と対象

日時：平成16年11月16日(火) 第2・3・4校時
 対象：神戸市立楠中学校1年生3クラス 計約120人

・実施概要

現在の生活の中でできるすまいの工夫や将来すまいを建てたり選んだりする時の検討の仕方を学ばせようと、担当教諭は全9時限の指導計画を作成していた。例えば、新聞の広告を参考に理想の間取りを選び、グループ討議や発表を経て「快適なすまい」の条件を学習する授業など興味深い内容であった。今回はその指導計画に専門家の目から見た「応用的なアドバイス」、「快適なすまいとはこんな見方もある」、「今できるもっと快適に暮らすための工夫」などを学ぶ授業を加えたいとの依頼を受け、本授業を企画することになった。また、授業例1を知っており、器具などを使って通常授業ではできない体感できる授業を希望していた。

企画にあたっては、安全・防犯・感情・情緒などあらゆる面で応用できるすまいの設備「照明」を取り上げることにした。照明は子どもたちの住生活においても身近なものであり、学んだ知識を実生活で活用することも期待できる。そこで、授業では近くの店ですぐに購入できる器具を用いた。さらに照明の効果を実際に見てもらうために実験用室内模型ボックス(写真2-2)を製作した。また、1クラス1時限(短縮授業のため45分)と授業時間が限られるため学習内容をイメージしやすくスムーズに進行できるように、事前に自分のすまいにある照明器具を調べてくる宿題をお願いした。当日は建築士4名、行政より3名を派遣した。



写真2-2 実験用室内模型ボックス

・学習のねらい

身近な照明の種類やその効果を知ること、適切な照明を選ぶ知識を得る

事故防止や防犯、心理的効果もあることを学び、日常生活に活用できることを学ぶ

・授業の流れ

授業の展開を表2-4に示す。

表2-4 「快適なすまいを考える・照明」プログラム

時間	内容	ツール
2分	あいさつ ・講師紹介 趣旨説明	
15分	基礎知識の講義 ・前日に調べた自宅の照明チェックシートを各自机に出す 自宅の照明を頭に描きながら講義を聴く ・光源の種類について ・演色性と色温度について ・必要な照度について 目的別、年齢別、場所別 ・照明器具のいると便利な関連機器 防湿、防雨、調光器、センサー等	・照明器具姿図リスト ・私のすまいの照明チェックシート ・パソコン ・プロジェクター ・電球サンプル ・蛍光灯(1種類) ・白熱灯 (普通球・クリプトン・ハロゲン) ・配布資料 色温度グラフ 電球の種類他
20分	実験 ・光を見る...光はどのようにして感じるかを知る 反射率の違いとその効果を確認する 黒一色のボックス ページュ壁紙 白壁紙に替えて照度も確認 ・演色性の確認 光源別による静物の色やツヤの変化を見る ・影とグレアの確認 ・光源の性質を知り、適材適所を考える	・室内模型のボックス 天井面、壁面シート 電球(蛍光・白熱) 白い食器・グラス・リコ・レモン・ビーマン ・暗幕・電源 ・照度計
8分	まとめ ・照明計画の実例紹介 今日からできること 参考になるものは身近にある...関心をもつ 例として店舗照明(物販・飲食店等の違い) 電気工事をしなくてもすぐに自分で改善できること、モノ	・パソコン ・ホームセンターで入手簡単な照明関連品のサンプル 常夜灯・センサーライト等

最初に照明に関する基礎知識として白熱灯と蛍光灯の違いや光の単位、目的や年齢にあわせた照明の選び方、購入時の注意点などを図表や写真を多用して説明し、その種類については実物を見せて確認する。これは後の実験をより理解するための予備知識となる。(図2-1)



図2-1 「私のすまいの照明チェックシート」と器具見本図

次に室内模型ボックスを使い、電球の種類やボックス内の天井・壁の色を変えること(黒 ページュ 白)で中に置いたグラスや果物の見え方がどうなるか実験する。各条件で照度も測定し、同じ照明でも内装材の違いによって明るさが異なることを確認する。最後にスタンドや蝋燭などを使った照明計画の事例を紹介し、日常生活に活用できることを学ぶ。

・授業を終えて

当たり前のように普段使っている照明であっても、その役割や効果的な使い方などは子どもたちにとって初めて聞く話であり、それが実験で明解となったことで新鮮に受け止めてもらえたように思う。ただ、あれもこれも伝えたいという気持ちから1回の授業にかなりの内容を盛り込んでしまった観もある。今回が中学校での授業初体験であり、まだまだ検討する点が多いと感じた。

授業例3) 災害に備えた住み方～地震対策編～

・実施時期(プログラム)と対象

日時：平成17年12月14日(水) 第2・3・4校時
平成17年12月16日(金) 第3・4校時

対象：神戸市立舞子中学校2年生5クラス 計180人

・実施概要

平成17年2月21日(月)に神戸市教育委員会が開催した家庭科教諭対象の研究会の場で、以前小学校向けに実施したプログラム(表2-1・1)を中学校で学ぶ「災害に備えた住み方」の授業として1時限(50分)のプログラムに再構成し、授業を受けていただく形で提案した。その授業は教諭単独で行えるように工夫を施し、後にさまざまな学校で実践され、兵庫県中学校技術・家庭科研究会でも発表された。今回の授業プログラムは、そこに参加した担当教諭から、着工したばかりの学校の耐震補強工事を教材として「地震に対する備えの大切さ」を学ぶ授業ができないかと相談を受け企画したものである。

企画にあたっては、阪神・淡路大震災をほとんど記憶しておらず、また自分では現在のすまいの状況を変えることができない子どもたちに、いかに地震災害を身近な課題として捉えてもらえるかに重点をおいた。その意味では「学校の耐震補強工事」は彼らの日常生活に密着した有効な教材である。また学校は災害時には地域住民の避難場所という重要な役割も担うことから、今回の授業を通して家庭、地域への防災知識の普及も期待した。授業は2日に分けてそれぞれ行政より2名を派遣した。

・学習のねらい

震災時のすまいの被害状況とその原因を知る

学校の耐震補強工事を通じ、建物(学校やすまい)の安全性確保のしくみを知る

災害時に限らず安全で安心に暮らすために知っておくべきこと、日頃から実践できることを学ぶ

・授業の流れ

授業の展開を表2-5・2-6に示す。前週に教諭単独授業としてプログラムを行い、学校の耐震補強工事の内容を盛り込んだプログラムを一緒に行った。

表2-5 「災害に備えた住み方～地震対策編」プログラム

時間	内容	準備するもの (下線は学校側で)
5分	・震災体験、これまでの防災学習を思い出す 震災時の住宅の被害状況を見る 震災時の体験談を語る (住宅倒壊・学校避難所・死因など)	被害状況の写真(A3サイズ)
30分	・紙ぶるで建物や地震で揺れるイメージを見せる 牛乳パックの輪切り(厚さ2.5cm統一)を建物に見立て、これを揺れに強い構造にするためにはどんな工夫をすれば良いかを考え、自分たちで実際に作ってみる	紙ぶる(注1) 牛乳パック(1人1パック) ハサミ・のり・セロテープ ポッチキス・定規
10分	・作ったものをグループ分けし、検討してみる 教諭が生徒の作品を見本にA～Dの4つの補強タイプを説明し、自分の作品がどのグループに入るかを考え、黒板に貼りにいく。 スペシャルは本人又は教諭から簡単に紹介	A(面)・B(斜め材)・C(角補強)・D(スペシャル)の表示 セロテープ
5分	・今日のまとめと次回の予告 被害の怖さ、地震に強い建物をつくる大切ささまざまな補強方法が考えられそう 次回の案内 (実際の建物では?学校の耐震補強工事・すまい方の工夫)	分類した生徒の作品は、次回授業で使用するので回収 校舎模型に使用する分を選び、予め接着しておく (4個組×2)

表2-6 「災害に備えた住み方～地震対策編」プログラム

時間	概要	準備するもの (下線は学校側で)
5分	<教諭> ・前回授業内容を思い出す 分類した作品を見て補強タイプの違いを確認 実際の建物では?学校の耐震補強工事は?	黒板にA～Dに分類された生徒の作品を掲示
25分	<ゲストティーチャー> ・牛乳パック校舎模型の補強無しと有りのパターンを揺らして違いを見る ・学校の耐震補強工事の内容を写真と図面で説明。前回考えた補強パターンはどう使われているか部分的な補強、目的による使い分け地震への備えの大切さ(既存改修・新築時など) ・地震で被害を受けた建物や避難所として使われる学校の写真を見て、耐震補強工事前に地震が起きたら…を考える ・質疑応答	・牛乳パック校舎模型2パターン 補強パターンには生徒作品を使用 ・工事写真、図面、プロジェクター、P.C、スクリーン 被害写真 学校(被害・避難所・仮設)住宅(内・外観)仮設住宅
10分	<教諭> ・建物の補強だけでなく自分達で今すぐ出来ること安全に対する意識を持つ すまい方の工夫(家具配置や固定、整理整頓)非常持出袋・非常食の紹介	教科書 非常持出袋 非常食
10分	<教諭> ・授業のまとめ、感想 工事後に学校の耐震補強をチェックしてみよう 将来すまいを選ぶ時には耐震対策も判断基準に! 今すぐ出来る工夫は家族で話し合って即実践!	「神戸市地震減災ガイド」

プログラムでは、震災時の写真や教諭体験談から被害の大きさ、怖さを知り、牛乳パックの輪切りを建物に見立てて地震に強い構造にするための工夫を考える。また、作品を分類することで補強方法の違いを確認する。

プログラムでは、牛乳パックを連結させた校舎模型に一方は補強無し、他方には彼らの作品を使って補強を加え揺れ方の違いを見る。(写真2-3)そして実際の工事内容を写真や図で説明し、前回授業で考えた工夫と結びつけて、その必要性や安全な建物について理解する。また、身近なところから自分たちにもできる地震への備え(意識・家具固定・整理整頓・非常持出袋など)を学ぶ。



写真2-3 授業の様子

・授業を終えて

補強した牛乳パックを何箇所か加えるだけで校舎模型の揺れ方が明らかに変わること子どもたちは驚き、これまでシートに覆われていた耐震補強工事の内容を写真で紹介すると熱心に見入ってくれた。この時期にマンションやホテルの構造計算書偽装問題がマスコミで大きく報道されたこともあり、鉄筋や耐震壁の説明には興味を持ってもらえたのではないだろうか。また、すまいの耐震化促進は行政の大きな課題でもあり、子供たちへの住宅施策の普及という面からも有意義な授業となった。

3. 今後の住教育の展開可能性について

1) 考察

このような学校・民間・行政による協働のしくみを生かした住教育への取り組みは、子どもたちのみならず、それぞれの参画主体にさまざまな影響を与えている。

学校にとっては、これまで気になりつつも十分に対応できていなかった住教育に取り組む機会が増えるとともに、外部から専門的人材を招いたり、新たなアイデアを得たりすることが可能となり、何より教員自身の住教育に対する意識が変わってきたといえる。

建築士等の専門家にとっては、自らの持つ専門知識や技術、アイデアを学校という場で活かすことで、専門家としての新たな役割を認識しつつある。またこのような活動を通じて建築士という職業を子どもたちに身近に感じてもらい、市民に建築士の存在と職能を広めていくことの重要性を再確認する機会となっている。

行政にとっては、学校を通じて住教育を行うことで住情報発信の裾野が広がるとともに、子どもを介して地域の保護者への波及効果が期待でき、効率的な広報手段としても期待している。まだ活動の初期段階ではあるが、住教育の実践の過程でこのような副次的な効果も期待できることがわかってきた。

これまでの活動を通じて、住教育を推進するために必要な要素を考えてみると、以下のような点が挙げられる。

住教育における教員サポート

多くの学校で外部から専門家等を講師として招くゲストティーチャー制度が活用されているが、住宅関係の専門家とのつながりを有する学校は少ない。またゲストティーチャーが対応できる授業数、生徒数には自ずと限界がある。そこで教員が自ら実施できるプログラムやワークシート、教材ツールを提案することで、より多くの学校での住教育実践を可能とし、幅広く普及を図ることができると考えられる。

また同時に、このようなサポート体制を整えていることを広く教員に知らせることも重要であり、モデル授業などの実践例を通じて、情報提供を積極的・継続的に行う必要があることも留意しておかねばならない。

“すまいるネット”＝受発信の場の存在

一般的に、学校や教員が直接住宅関係の専門家と接点を持つことは難しい。しかし、熱心に住教育に取り組む教員の多くは、教科の理解を深めるために教科書には載っていない情報や専門家とのつながりを求めている。そこで重要な役割を果たすのが、すまいるネットの存在である。すまいるネットは建築・法律・不動産関係等さまざまな団体の参画により運営され、すまいを切り口に幅広い分野への対応を実現している。また行政の設置機関であることから、市各部署との連携も可能な立場にある。このような機能を有するすまいるネットを住教育ネット

ワークの核とすることで、求める情報の入手や異なる分野・人材とのつながりが可能になる。また行政施策と連携することで、より効果的な活動が行えることも期待される。このような情報発信の中心となる「場」の存在も住教育推進に大きな役割を果たすと思われる。

WGに見られる意見交換・相互交流の場

これまで学校教育、民間の建築業界、行政の住宅施策は別々のものであり、共通の課題を見出そうという試みはなされていなかった。しかしワーキングを重ね、すまいを巡る社会問題と各々の抱える課題への理解が進むにつれ、その具体的な接点としてモデル授業などが実現されてきた。異なる分野との交流は新たな刺激を受けるとともに、発見・気づきにつながる可能性も大きい。このWGのように実際に顔を合わせ、議論をする機会は貴重であり、住教育への取り組みが今後さらに前進していくための基本的な「場」になると考えられる。

またこのような活動は、知識だけでなく体験を通じて子どもたちの「住」に対する理解を深め、「主体的に考え、行動すること」を意識した授業づくりに、地域社会が一体となって取り組むことにも大きな意味がある。

2) おわりに

我々は阪神・淡路大震災を経験して、すまいが生活の重要な基盤であることを改めて認識した。しかし、現実には高齢者を狙った悪質リフォーム詐欺、マンション構造計算書偽装問題、アスベストによる健康被害など、すまいの安全・安心を脅かすさまざまな事件や問題が多発している。これらの不安を取り除くためには、消費者に向けて正しい情報を発信し、すまいに関する普及・啓発活動を進める必要があるが、あわせて将来の消費者である子どもたちへの住教育推進が、起こりうる住宅問題を未然に防ぐための重要な予防策になると考えている。さらにすまいだけでなく、これを取り巻く住環境への理解を深めるために、まちづくりと一体的に考える視点を与えることも必要であろう。

社会がますます多様化・複雑化していく中、子どもたちが自立した消費者として本当の意味で「生きる力」を身につけられるように働きかけていくことが、我々大人の責任ではないだろうか。住教育の場はそのための重要な機会であり、今後もより一層の取り組みを進めていきたいと考えている。

<注>

1) 名古屋大学福和研究室が開発した振動実験教材

<参考文献>

- 1) 住環境教育研究会:住教育 未来へのかけ橋,ドメス出版,1982.11.
- 2) 財団法人住宅総合研究財団住教育委員会:まちはこどものワンダーランド,風土社,1998.7.